

信者の生涯の結実―内村鑑三に学んで

イザヤ書六四・七

されどエホバよ 汝はわれらの父なり

われらは泥塊つちくれにして 汝は陶工すゑつくりなり

われらは皆 汝の御手のわざなり

聖歌二九五 讚美歌四九四

はじめに

昨年秋浜名湖で日本友和会の全国大会が開催された折、武井陽一さんから話をしにこないかというご親切なお誘いをいただきました。私は勝手に小人数の座談会のようなものと思いきや、私には受けがたいところ、後刻正式に日曜集会へのお招きで大へん驚き恐縮しております。実は今日は三回目、この何でもない人間を三回もお招き下さった浜松の皆様のご厚情に深く感謝申し上げます。



武藤陽一・富子夫妻

そこで何のお話をしたのかと案じましたが、武井さんが私の編集した内村鑑三の『続一日一生』という本が刊行ちょうど五十年だと気付かせて下さいましたので、この本の内村から私が何を学んできたかについて少々申し述べてみようと思いました。

まず表題に掲げた「信者の生涯の結実」という言葉が出てくる一文を紹介します。

信者の生涯は、始めは悪くして終わりは善くある。

終わりに近づくほど、ますます善くある。生命いのちの夕暮になればなるほど、彼は何ものか、彼の心の奥深き所に結実しつつあるを感ずる。人あり、彼に、その生涯の中に最も愉快なりし時はいつか？ と聞くならば、彼は常に今なりと答うるのである。そうして彼の最後（ラスト）が最善（ベスト）である。あたかも年末のクリスマスが、彼にとり最も喜ばしき期ときであるように、彼の生涯の終わりが、彼にとり最も感謝多き時である。そうして彼が特別に感謝してやまざる事は、彼の生涯の計画がごとく失敗であって、彼の計画に反せし神の御計画が彼の身において成ったことである。

「このゆえに、われ、弱きと凌辱はすかしめと空乏と迫害と艱難なやみに会うを楽しみとせり」（コリント後書一二・一〇）。

（12月30日項）

老いのきざはしに立つ者に、深い感懐をもたらず言葉でありました。

次に、私の話の順序を決めるために次の文章を選びました。

信仰は内でありまた外である。日に見ゆる外なる物の証明にあわせて、目に見えざる内なる霊の承認ありて、確乎動かざる信仰があるのである。信仰が内に限られて神秘化し、夢のごときものとなりて消えやすくなる。また外に限られて浅薄になり、政治、経済と類を同じゅうし、この世の勢力と化するのにおそれがある。信仰もまた健全なる身体のごとくに二本の足に立たねばならぬ。外なる歴史と天然と、内なる確信と道義の上に立たねばならぬ。

（7月2日項）

これに従って、話の前半は「信仰の内」、後半に「信仰の外」をお話ししたいと思います。序でながら、この文章も内村の思考の特性の一つである「楢田の思想・信仰」をよく表していると思います。

今日の話は私自身の「信者の生涯の結実」のことですので、話が甚だ個人的になりお聞き苦しいこともあるかと恐れますが、「聖歌」(一七二番)にあります「Count your blessings one by one (数えてみよ、主の(私への)一つの恵み)」の気持ちからであると、どうぞご容赦ねがいます。

信仰の「内」——無教会主義のキリスト教

まずこの本『続一日一生』の成り立ちについて簡単に申しあげます。今年(一九七〇年)は戦後七十年ですが、その戦争末期の一年九か月軍務に服し、一九四五年八月に十八歳で復員、戦後の大混乱の東京で、とに角生きるために進駐軍労務者としてひたすら労働に明け暮れていた中で、英語を勉強し英文タイプを習ったことがきっかけで「外務省文書課英文タイプ係」というところに職を得ました。そ

の職場の英語クラスにたまたま講師としてやって来たアメリカ人宣教師と出会い、彼女に導かれて初めてキリスト教に接しました。

やがて私は信仰を与えられ、キリスト教の仕事をしたいと願うようになり、その宣教師の勧めもあって、職を辞してある聖書神学校に学んで教会牧師となり(49年)、熱心に伝道に従事しました。しかし熱心になればなる程アメリカ式のキリスト教の現世利益的宗教性(と私には映った)にたえられなくなり、一九五六年四月にその教会を離脱しました。

その直接的契機は、友人を通して『聖書講義』という聖書雑誌を読んだことで、やがて私はその雑誌の主筆山本泰次郎先生(一九〇〇〜七九)の個人的知遇を得、先生を唯一の信仰の恩師として、先生に習って、先生の恩師である内村鑑三のキリスト教に生きようと決心したのでした。そのキリスト教について内村はこう言います。

キリスト教は制度ではない。教会ではない。それはまた信仰箇条ではない。教義ではない。神学ではない。それはまた書物ではない。聖書ではない。キリストの

ことばでもない。キリスト教は人である。生きたる人である。きのうも、きょうも、永遠いつまでも変わらざる主イエス・キリストある。キリスト教がもしこれでないならば、つねにいます生きたる彼でないならば、これ何でもないものである。余は直ちに彼に行く。教会、法王、監督、その他有象無象の役僧を通して行かない。「われ、彼らにあり。彼ら、われにあり」と彼はおのが弟子について言いたもうた。キリストが歴史たらざるに至る時―そうしてキリスト教は歴史ではない―教権を有する教会なるものは消えてしまうのである。

(9月25日項)

序でながら、この項の表題につけた「無教会主義のキリスト教」という名称は、内村自身が「霊と形」という英文の論文の中で、自分が四十年間教えてきた「この形なきキリスト教の形」を、ほかに「よりよい名称がないので」として、自ら日本語に訳して付けた名称です。

教会を出た時私は「アモス書」を講読していましたが、私と行を共にした数人の友人たちとその学びを続けまし

た。会場を転々とするうちに、誰言うもなくその会合をアモスの出身地を取って「テコア会」と呼ぶようになったのが、私どもの「テコア聖書集会」の始まりです。十年一日地味な聖書の勉強を続けている小さな集まりですが、来年で六十年になります。

教会を出てからほぼ十年、この「テコア会」は別として、私は独りでおりましたが、ちょうどその頃山本先生は教文館版『内村鑑三聖書注解・信仰著作・日記書簡・英文著作全集』全五七巻の編集をなさいました(’60〜’73年)。私は先生のお申し付けで、全巻の総索引作成や校正その他のお手伝いをすることができました。その折、先生が内村の『一日一生』に習って新しい第二の「一日一生」を編集したらどうかと発議され、私にその実務をお任せ下さいました。私には過ぎた任務でしたが先生の信頼に応えることができて、先生はこれを私との共編として刊行されたのでした。五十年前の一九六四年末のことです。

その『続一日一生』は『一日一生』と違って、日記・書簡と英文著作は除きますが、内村のほぼ全著作をその引用源としています。また私自身そうなるよう些ちひさかの努

力をした積りですが、第一のそれより内容的にはずっと
バラリアティに富んでいると思います。更に言えば、い
わゆる教義的文章よりも、具体的・生活的に信仰と信仰
生活のありようを示す文章が多いかも知れません。何に
しても、内村鑑三という人間の福音信仰と福音的人間性
が全編に息づいていることは確かであると存じます。そ
して、もし許されるならば、本書は私にとって私自身
の信仰告白でもあることを、感謝をもって告白したいと
存じます。

前置きの話が長くなりました。ではこの本から私は
いかなることを学んだか。私はまず、私の思い上った教
会時代の伝道観を一喝された次の一文を引きたいと思
います。

日本国のごとき不信国においては、キリスト教の信
仰を維持する事だけが、伝道的に見て一大事業である。
べつに教会を起こすに及ばない。多数の信者を作るに
及ばない。宗教的大著述をなすに及ばない。一たび受
けし信仰を果敢に頑強に守り通す事だけが大きな伝道

事業である。日本国において純福音を信じ通す事は至
難の業である。その事は、一たび信仰に入りし者にし
て、千人はわれらの左に倒れ、万人はわれらに右に倒
れ（詩篇九一・七）しによってわかる。：そうしてこ
の事をなし得て、われらは大事をなし得しことにつ
て神に感謝すべきである。あるいは三十年、或いは
四十年、あるいは五十年、この社会の冷淡、嘲笑、反
対の中にわが信仰を維持することを得て、われは善き
伝道をなすべく許されたのである。あえて他に伝道事
業を企つるの必要はない。内に対しては明白に、外に
対しては独立に、一生信仰を守り通して、われらはそ
れだけにて善き伝道師たり得たのである。

（6月13日項）

「二つのJ」を愛する者ならでは、確固たる伝道観
ではありませんか。

「独り」の道（その時生活的にも窮乏していましたが）
を歩み始めた時、不安におののく私を力強く励ましてく
れたのは「信仰は冒険である。冒険の無き人生に興味な
く、信仰の無き生涯に意義が無い。：この宇宙に生まれ

出でし以上、冒険はまぬかるべからず。信仰は廃すべからず」（2月3日項）という言葉であり、「肉の事については普通の人のたれ。霊の事については特別の人のたれ。世が見ては普通の農夫たれ。普通の商人たれ。：されども神の眼より見ては、：キリストと共に歩む神の子たれ。外は他の人と異ならんと欲するなかれ。ただ内に神の光を宿して、暗き世にありてその暗黒を照すべし。ナザレのイエスに鑑みよ。彼は身は木匠にましまして、霊は神のひとり子にましまして」（4月18日項）の一文は、信仰をもって世俗に生きる何よりの心得になりました。人生右するか左するか、進むべきか退くべきかの選択決断を迫られた時には、「成功の秘訣」と題する次のような文章に良き指針を与えられました。「境遇の強うるところとなりて事をおこなえば、その事必ず成功す。みづから境遇を作りて事をおこなえば、その事必ず失敗に終わる。：みづから計画して作りし境遇はおのが声なり。：成功の秘訣は、神に強いられざれば起たざるにあり」（12月2日項）。また人生に必ずやってくる「疑問あり煩悶ある時、ただちに解決し得べきものではない。ただ必ず神より解答を賜わる時あるべしと信じて、希望をもつ

て今の痛苦を慰むべきである。いそぐなかれ。あわつるなかれ。神を待ち望め。静かに待望せよ。これ暗中に処する唯一の健全なる道である」（2月18日項）と諭され、安心を得たのでした。

内村は自分のクリスチャン・ネームにヨナタンを選んだ程に友情の人でした。「われらキリストの弟子はすべて相互の友であらねばならぬ。友は対等である。助けまた助けらる。教えまた教えらる。友は相互を愛して、その内の誰をも主と仰がない。永久に消えざる者は『キリストにある友』である」（9月24日項）。因に、内村の生涯の友のひとりにはアメリカ人ダビデ・C・ベルでした（サムエル記上18・1参照）。

この友情に関連して、私がぜひ紹介しておきたいと思うのは、今や「電通」に取って代わられつつある「文通」についての次の文章です。「文通、英語のコレレスポンスに反応の意あり。すなわち、われ彼を愛して彼これに応ずるに同一の愛をもつてするの意なり。愛の反応これ文通の意なり。：吾人は書簡によりて吾人に対する友人の愛情を知らんことを欲す。これ書簡の貴きゆえん

なり。愛心のなき所には書簡はあらざるなり。書簡は愛心のあふれて文字となりしものなり。もし世に愛の福音なるものあらば、これ書簡文を除いて他にあらざるべし（9月3日項）とまで言っています。新約聖書のおよそ半分が書簡であることを思えば、これもあながち言い過ぎではないでしょう。

とに角私はこの一文に励まされて、四十歳を過ぎてから「通信教育」で大学を卒業したばかりでなく、無教会の講座伝道事業の一つである「聖書語学通信講座」の講師・責任者を二十年間も勤めてしまいました。勉強ばかりでなく、おかげで実に多種多様の立場の人々と交流することができました。有難いことでした。

内村のキリスト教が聖書のキリスト教であることは、今更申すまでもありません。本書の中にも実に多くの聖書に関わる言及があります。その言わば代表として次の短文を取り上げたいのですが、その理由は、聖書をこのように紹介してくれる聖書の先生を、私は内村のほかに知らないからです。

灯火親しむべき秋が来て、第一に読むべき書は聖書である。聖書を読んで永久の利益がある。聖書を読んで、人は老いて老いない。彼の心に永久の春がある。聖書を読んで、理想が尽きない。詩と歌と音楽とはその必然の結果として、わが口より流れ出る。聖書を読んで知識欲が増す。宇宙と人生とについて広く深く知らんと欲する欲求がわいて尽きない。もし世に神の言葉があるならば聖書を措おいてほかにあるとは思えない。人類の所有のうちで最も貴いものは書籍であって、書籍のうちで最も貴いものは聖書である。

（10月8日項）

先に申しましたが、私はこの文章に接する前にもちろん聖書を読んでいました。しかし、その読み方は結局、教義・教条的かつ宗教的なもので私の命にはなりませんでした。この内村の言葉によって、私は初めて本当の意味で「聖書を読むこと」に開眼し、「聖書を読んで知識欲が増し、宇宙と人生とについて広く深く知らんと欲する欲求がわいて尽きなく」なり、聖書ばかりでなく様々のことに関心を抱き、勉強するようになりました。その

結果の一つである聖書ギリシア語を、先に言及した「聖書語学通信講座」を含め無教会講座・研修所で教えることができ（'71-'06年）、聖書を読むために夢中になつて勉強した英語は結局生活の糧の元となり、自営の塾や学校などの講師を勤めることができました。有難いことでした。

内村は更に申します。「聖書の研究なり。その批評的研究にあらず。また感情的探究にあらず。聖霊により、常識をもつてする、深き静かなる研究なり。あらゆる思想に訴え、あらゆる事実に鑑み、宇宙と人生とを支配する神の聖意の探究なり。聖書の研究はすべての研究の中に最も広くして最も深き研究なり。実在の中心に達せんとすることなり。愛をもつて万有を解せんとすることなり」と（11月1日項）。そして「聖書の研究は困難なる事業である。：しかしながら聖書研究にまさるの伝道はないのであり」（7月22日項）、「公平なる聖書の研究は、有益なる公的事业の一なり」として、「教会を離れたる聖書研究会の設立を促し」（4月26日項）、「聖書を教えよ、聖書を学べよ」（8月23日項）と勧めています。

私もこの内村の勧めに励まされて、学校で、町中で、

特に「英語聖書」を読む勉強会を長く続けてきました。これまた有難いことです。

「無垢」という語―聖書講解

ここで話に一と息入れたいと思います。幕間とでも言いましょか。

私は長いこと言葉を教えることを生業としてきたので、当然なことながら言葉に関心があります。これは聖書の勉強の場合も同様で、言語にこだわるのが私の聖書の読み方における一つの型になってきました。これはその小さな一例としてお聞き下さい。

昨年編者武井陽一さんの並々ならぬご尽力で『無垢の心をこがれ求める』という「伊藤邦幸・聡美記念文集」が刊行されました。武井さんによると、この書名は伊藤邦幸の「読書録」に記された詩「偶成」から取られた由ですが、私にはこの「無垢」という語が深く印象に残りました。「わたしを洗ってください、雪よりも白くなるように」（詩編51・9）という詩編の一句が脳裏に浮かびましたが、果してこの語は聖書にあるだろうか。

実はありました。これは全く偶然なのですが、私は昨年から日曜日の集まりで「詩編」を（とびとびに）読み始めたのですが、この二月に「詩編37」を読んだ時にこの語に出会ったのです。「無垢な人の生涯、無垢である」と努め」（18、37節）と。そこで調べてみますと、決して多くはありませんが他の詩編中のほかにもノア（創6・9）、ヨブ（1・1、8・20）について使われていました。ただし、これはすべて「新共同訳」のことで、「口語訳」では「全き」です。アブラハムの場合は両訳とも同じで「全き」が使われています。「あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ」（創17・1、口語訳）。ところがヤコブの場合はこれも両訳とも同じく「穏やかな」としているのです（創25・27）。ヘブライ語の原語は「ターム」で、辞書的にはもちろんどの訳語も可能です。いずれにしても、ここで私が指摘したいことは、実はヤコブについての「関根正雄訳」（岩波文庫、'53年）です。先生は「彼は心一途な人となった」と訳しているのです。ヤコブは兄エサウをだまして、その長子の権利と祝福を奪ったような、決して「無垢」でも「穏やかな」でも、まして「全き人」などとは見えないのに、神はなぜ「わ

たしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」（ローマ9・13）と言われるのでしょうか。私どもに神意は推し測れませんが、私は彼が「心一途な」人であったと言われると、納得ゆく気がします。ヤコブは、人間的にはどうであつたにしても、神に対して「心一途な人」であつた。そう言えば、彼は妻ラケルに対しても全く同様でした（創29・20参照）。ここに信仰の秘義があります。

この旧約聖書ヘブライ語「ターム」に当たる新約聖書ギリシア語は「トレイオス」で、その代表的用例は「山上の説教」にあるあのイエスのお言葉です。神がアブラハムに「あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい」と命じられたように、イエスは私どもに「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全者となりなさい」（マタイ5・48）と命じられます。この「完全な者」については、様々な解釈があるでしょうが、私はかのボンヘッフアーの次の言葉から殆ど天啓的な理解を与えられました。彼はその「獄中書簡」の一つの中で次のように言います。「問題は全体的人間（アンスローポス・トレイオス）に関わるものであり、…

要するに、自ら『全体の一員』となることによつて、『完全をなす』のである。われわれは自分一人で『完全な者』となるのではなくて、ほかの者と一緒になつて初めてそうなるのである」（『抵抗と信従』新教出版社、'64年）。

関根訳と青い、ボンヘツファー理解と言ひ、何と示唆的であることでしょうか。そして、これ程に自由に、多様に、どこまでも広く深く読むことを許容する「聖書」なる書籍は、正に内村の言うように、「もし世に神の言があるならばこれを措いてほかにあるとは思えない」と賛嘆せざるを得ません。

信仰の「外」―キリスト教平和主義

このボンヘツファーの「完全あるいは全体」の理解は、私の信仰生活に画期的影響を与えました。それまでは、私は無教会主義はどこまでも「独り神の前に立つ」という、いわば「独り主義」だと信じて独りでいたのですが、折も折「無教会」の友人たちが差し伸べてくれた友情の「交わりの手」（ガラテヤ2・9）に導かれて、「神の国」なる全体の一員として共に生き共に働くことの大切

さに目覚めたのでした。それは「信仰の外」の面への気付きであり、私の場合それは自ずから「キリスト教平和主義」に生きることでした。

いま「自ずから」と申しましたが、それには二つの理由があります。それを申しあげる前に、話の後半全体に関わる内村の文章を二つ掲げておきます。一つは『続』の八月十五日項ですが、実は『続』には平和に直接関係する文章は必ずしも多くないので、もう一つは別に「キリスト信者の平和」と題する小文を選びました。

戦争の廃止、そのことを実現するための手段はイエス・キリストの福音の宣伝である。エホバのみ名を揚ぐることである。彼の家の山をもろもろの山の峰に堅く立つることである。イエス・キリストのおん父なる愛の神に、最上の権威と栄光とをたてまつることである：これを除いて他に戦争廃止の実行を見る道はないのである。イエス・キリストの十字架の福音、エホバご自身が彼にそむきし人類に提供したまいし和解の福音、ギリシャびとには愚かなること、ユダヤびとにはつまずきの石、哲学者があざけり、宗教家が疑いを

さしはさむこの単純な福音こそ、最後に国をして兵備を解かしめ、民をして剣を打ちかえて鋤となし槍を打ちかえて鎌となさしむる最大唯一の勢力である。

(8月15日項)

キリスト信者に平和がある。「神より出でて、人のすべて思うところに過ぐる平和」(ピリピ書四・七)がある。これは「平和でない平和」ではない。すなわち長期の休戦の意味においての平和ではない。われらは「平和なき時に平和平和と言う」(エレミヤ書六・一四)者ではない。われらの平和は確実なる実体の平和である。何びともわれらより奪うことのできない平和である。

ゆえに、われらの福音を「平和の福音」(ロマ書

一〇・一五)と言う。われらの神を「平和の主」(ピリピ書四・九)と言う。われらの救い主を「平和の主」(テサロニケ後書三・一六)と言う。またわれらは「平和なる福音の備えを、くつとして足にはき」(エペソ書六・一五)て、われらの平和の戦場に臨む。平和はわれらの始めであってまた終わりである。目的であってまた

方法である。キリスト信者の所有を総括したものが平和である。彼の全性にしみわたり、彼の全生涯を支配するものが平和である。「それ神は乱れの神にあらず、平和の神なり」(コリント後書一四・三三)、かかる神を拝する者は、何よりもまず平和を愛する者でなくてはならない。擾乱じょうらんを愛し戦争を好む者は、イエス・キリストの御父なるエホバの神を信ずる者ではない。

(『信仰著作全集21』157頁)

さて「二つの理由」と申しましたが、それは内村の「非戦論」と、私自身の「軍隊体験」です。

私が山本泰次郎先生に出会って間もない頃、先生は内村の『非戦論』(角川文庫、'53年)という編著を出されました。これは今では平和主義の古典的文章となった「戦争廃止論」「非戦論の原理」「世界の平和は如何にして来るか」など、およそ非戦平和に関する内村の論考すべてを収録、解説した、他に類を見ない貴重な本でした。私はこれによって「キリスト教平和主義」に開眼し、その会得には永い時間を要しましたが、とにも角にもそれを自分の信仰生活の指針として生きてきました。

私は山本先生を通して内杵から、無教会主義のキリスト信仰と福音的非戦平和主義とを同時に習ったのでした。

私の「軍隊体験」は先にも申しましたが、大戦末期の一年九か月程、海軍飛行予科練習生としての訓練と、任官後の鈴鹿海軍航空基地における特攻用飛行機の分散基地造り作業とに従事したものでした。ここで詳しい話をする余裕はありませんが、私の体験した「天皇の軍隊」は、本音と建前の乖離、弱者排除の集団志向、勝利至上の盲目的忠誠、残酷な疑似精神主義の渦巻く陰湿な生活の果てに、特攻などという不条理な死を強いる甚だおぞましいものでした。もちろん今こう言えるのは、福音信仰のフィルターを通しての省察ではありますが、在隊中の軍国少年をすでにいたく失望させたものであったことも事実です。

私は戦後ほぼ半世紀にわたって、幸いにも教職を生業とし、日々若い人たちに接してやることができました。その際私が教師として切に願ったことは、この若者たちが二度と再び「軍隊」に行くことがないように、という

一事でした。英語を教えても聖書を敢えても、私の授業は常に平和教育であれかしと願いました。そういうわけで、いかにささやかなものであったにせよ、それが戦争世代の私から次世代への、せめてもの贈物であり、かつ私の愛国心の表明でもあったと思っています。

戦争世代の人間が、それも僅かながら軍隊を体験した人間が、今や平和主義に生きようとした時、まず直面したのは戦争責任の問題でした。これについては、私はまずあの戦争の実態を知りたいと強く思いました。

そこでまず、春休み・夏休みなど仕事の合間を利用して現地へ出かけることに努めました。多くの場合いわゆる「スタディ・ツアー」に参加してですが、一九七〇年代にはY M C Aの関係でタイ、ミャンマーなど東南アジアの国々、八〇年代には七八年に入会した「日本友和会」の会員として専ら韓国、九〇年代には「緑の贖罪」の南京献植訪中団に加わって中国、無教会「台日キリスト者の会」で台湾、中高教師の研修旅行に同道してマレーシア・シンガポール、子供の教育支援活動でフィリピンなどを訪ねることが出来ました。そして実に幸いなことに、

その多くの国々で心を許し合える良い人々と出会い、以降長く個人的な「文通（愛の反応）」を続けました。古い地図で、かつて日本軍がその足跡を印した土地に赤点をつけると、東アジアはおろか西太平洋一帯まで真赤になってしまいます。そのいずれの土地においても、日本の軍隊は非人間的暴力を揮い、「従軍慰安婦」をはじめとする様々な人権侵害を行い、非道な植民地支配と不法な軍事侵略によって、多くの国々の多くの人々を苦しめました。この事実をその被害者自身の証言を通して知らされることは、日本人として実に辛いことですが、謙虚にしっかりと受け止めなければなりません。戦争も自然災害の一つのように考えて、いつも自分を被害者のみ思いがちな私どもは、あの戦争では日本人は被害者ではなく加害者であったことを決して忘れてはならないと思います。

この認識の中で、私には沖縄に特別な思い入れがあります。実は、私は教会時代に、沖縄出身の友人と彼の関係するアメリカ人宣教師方の伝道を応援するために、早く一九五二年の夏休みに占領下の沖縄を初めて訪問しました。この仕事は三夏続いて終わりましたが、以後沖縄

は私の中で忘れられない所となりました。「日本復帰」（'72年）前後の時期、沖縄の医療に携わられた医師野村実先生（一九〇一〜一九六）からは（一度は現地に先生をお訪ねして、多くは先生らしい繊細な洞察に満ちた沖縄リポート（『著作集』下、Ⅵ沖縄に一部収録）を通して）、日本の沖縄に対する長い差別の歴史や、米軍基地は日本の第三の「琉球処分」だとする深刻な見解など、多くを教えられたのでした。

こうした幾分の知識と自覚を持って、日本友和会の「沖縄・平和の旅」に参加したのが一九八三年。その時ちようど伊江島反戦平和資料館「ヌチドウタカラの家」開館準備中の阿波根昌鴻あはこんしやうこうさん（一九〇一〜二〇〇二）に初めてお目にかかりました。この尊敬すべき平和主義者にはその後ご逝去の前年まで何回かお会いし、あの温容と独特な話しぶりに接することが許され、まことに幸いでした。阿波根さんと内村との思想的・精神的通有性について、昨年度沖縄の内村鑑三記念講演会における武井陽一さんのご講演「沖縄は世界のために」の「阿波根昌鴻」の項（『みぎわ』54、118〜119頁）の甚だ啓発的な考察をご参照下さい。

またこの「旅」のガイドをして下さった友寄隆静さんは、その後も一貫して私どもの最も信頼する「沖繩問題」ガイド役であることは、皆様よくご存知の通りです。

序でながら、この訪沖のあと私は普天間と嘉手納飛行場の「一坪反戦地主」となっています。

現在只今の「辺野古」については、いま何かを言う余裕は全くありませんが、ただ沖繩の尊敬する友人たちの心に、どこまでも寄り添おうとするヤマトの人間でありたいと願うのみです。

この旅行でもう一つ忘れられないことがありました。それは韓国の咸錫憲はむそくほん先生（一九〇一〜八九）が私どもとご一緒して下さいましたことです。先生は古い内村の弟子であり、韓国無教会の先達のひとりですが、解放後は「韓国のガンジー」と呼ばれて彼の国の民主化運動を指導された方でした。八十年代の友和会の「韓国・平和の旅」は、総じて先生の講話を伺うことと、先生を師と仰ぐ民主人士たちとの交流が主題でした。

先生は、その著書の中で孫文の名言「行うは易く、知るは難し」（普通の考えとは反対）を引いて、「それは

どんな意味かという、知ることを正しく知らねばならない。知ることができなくてもまねはできるが、本物にはなれない、ということですよ」と説いておられます。（『著作集』第九巻、143頁）。特に平和運動に携わる者にとって、これは至言であると思います。

「本物の平和主義者」でありたいと願う私の目の前に現れた一冊の本がありました。それはR・H・ベイントン（中村妙子訳）『戦争・平和・キリスト者』（新教出版社、⁶³年）と言う本で、その原題「Christian Attitudes Toward War and Peace」が示すように、私にキリスト教平和主義の全体像を示してくれました。ベイントンという著者はクエーカーの神学者ですが、幸い後日來日の折に友人の紹介でお会いし、食事を共にすることができました。穏やかできさくな老学者でした。

平和主義との関わりで次に、私が代理人（弁護士）なしの本人訴訟によって提起した裁判（私が原告で、国を被告とする民事訴訟、行政訴訟）の報告をいたします。

それは「良心的軍事費拒否裁判」と言われるもので、「良

心的兵役拒否」の精神に習って、違憲の存在である自衛隊の維持・運営に要する費用（軍事費）を税金として負担することは、民主主義国に在って平和主義を生活の指針として生きる市民にとって良心的に耐えられないので、その分の納税を拒否する権利を認めよ、とするものです。一九八八年五月から二年にわたって、十一回の公判に「訴状」と七通の「準備書面」を提出して訴えましたが、敗訴でした。

この時、当時まだ面識も殆ど無かった伊藤邦幸さん（一九三一〜九三）が、はるばるネパールの山中から「遠き国より司法官諸兄姉に訴える」（『無垢の心をこがれ求める』²³²頁）という書面を送って、まさかの応援を下さいました。大いに感激し、深く感謝したことでした。

私はもう一回イラク戦争当時、「自衛隊のイラク派遣は違憲」とする本人訴訟をしましたが、運動とか集団行動が些か苦手の人間にとっては、独りでも出来る裁判は法律には素人でわからないことだらけですが、一市民の平和活動（自分の主義・主張の表明、政治権力に対する異議申立て、など）として便利な一つの方法ではあり得ると考えます。

裁判の経験から私は、何よりも法的思考なるものについて、更に憲法については立憲主義、平和主義に関わるものとしては平和的生存権、抵抗権、人権としては思想・良心・信教の自由と集会・表現の自由、税金問題では納税者基本権（憲法三〇条には納税の義務の規定はあるが、権利の規定がない！）など、学ぶところ実に多く有益でした。

平和主義の話を終える前に、あと三点付け加えることをお許し下さい。いずれも私の個人的な意見です。

第一は、「平和」と「平和主義」は違うということです。平和は「神の平和」です。「あらゆる人知を超える神の平和」（フィリ 4・7）であって、絶対の平和です。これに対し、「平和主義（パシフィズム）」とは、「平和の神がわたしたちと共にいて下さる」（フィリ 4・9）ことを信じ、「わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ている」（ローマ 5・1）恵みを感じて、私どもも「平和の主」（テサニ 3・16）に従って「平和を追い求め」（テモテニ 2・22）「平和を実現する」（マタ 5・3）生き方をしようと志す信仰的決断を言うもの

だと心得ます。具体的には、主イエスの無抵抗と愛の教えに則り（マタ5・38〜48、26・52）非軍備、非戦、非暴力（抵抗）の立場を堅持します。

私はこのように考えることにより、私ども平和主義者が、主義者の陥りやすい頑迷と傲慢から身を守り、同時に、いかなる絶望的状况に立至っても、なお希望を失う事なく生きることができないのではないかと思っております。

第二点、内村はその最晩年、英文で「新文明」という一文を綴り、こう訴えました。「今こそ、日本は眠りから醒めるべきときである。膨大な軍事予算をとまなうこの西洋文明は、完全に放棄されなければならない。日本は新しい文明を、真に文明であるところの文明を始めるなければならない―それは戦争のない文明であり、神の預言者によって宣べられた文明である（イザヤ4・2）：わが日本が国家の武装解除を宣言し、こうして全世界に新文明を招来しうるなら、それはなんとすばらしい日であろう」（道家弘一郎訳『英文論説翻訳篇下』300頁）。これは九十年前の文章ですが、現今かまびすしい「戦

後七十年平和宣言」にびったりと考えますが、いかがでしょうか。

第三点も内村の言葉です。内村と言えば「預言者」ですが、ここに彼が珍しく「祭司」を論じた文章があります（「祭司とは何ぞ」・『信仰著作全集14』136頁）。そのごく一部分が『続』に引かれています。私はここの「祭司」を「平和を実現する人」と読み変えて、第二点の彼の切々たる「祈り」を胸に、これをキリスト教平和主義者にとつての大切な心得としたいと存じます。

祭司、世に貴むべき職にしてこれにまさるものはない。これまことに聖職である。唯一の聖職である。神を人に紹介し、人を神につれ行くの職、これまことに慕うべく懇求^{もと}むべき職である。

人はすべて、神が彼をおきたまいしその地位にありて善き祭司となることができる。まずナザレのイエスに教えられ、神の心の何たるかを知り、その、愛であつて、恐怖でないことを知り、その、おのがひとり子をさえ惜しまずして与えたもうほどに、人を愛したもうを知り、

同時に、また自己^{おのれ}を知り、おのが罪を知り、これを除く
の道を知り、悲痛^{かなしみ}を知り、艱難^{なやみ}を知り、これによりて同
情を知り、慰藉の術を知り、平・和・獲・得の秘・訣を知りて、
われら何びとも、神と人との間に立ちて、神を人に紹介
し、人を神に導きて、祭・司の聖職を果たすことができる。
これまことに人として最もふさわしき職^{わざ}である。

(2月25日項)

おわりに

ここまでお話ししてきて、内村の申す通り、「信者」
にとつては常に「彼の最後(ラスト)は最善(ベスト)」
であり、貧しい私の「心の奥深き所にも何ものかが結実
しつつある」のを感じないわけにはまいりません。
ではそれは何かと省察するに、それは、私の場合、結
局実に良き「出会い」に恵まれてきたという一事に尽き
るようです。皆様のご親切に甘えて、足りない言葉です
が、その跡を長々とたどってきた次第ですが、私はいま
それを老子のかの有名な言葉「天網恢恢疎^{てんもうかいかいそ}
にして漏らさず」を、彼の意とは正反対に解して、「天網(へブンリー・

ネットワーク)のいかに広く、深く、細やかなること
よ！」とただただ感嘆、感謝するばかりです。

この度のお話をするために、『統一日一生』をまた
あれこれと読み返していて、改めて気が付いたことがあ
りました。それは内村の信仰が極めて来世的であるとい
うことです。そのことをどうしてもお伝えしたくて、多
くある中でこの一篇を選びました。

そうして信仰の進歩と共に今世はますます軽くな
り

て来世はますます重くなるのであります。身は今なお
幕のこなたに留まりますが、心はすでにあなたに移
りて、その栄光を感じるのであります。そうしてかな
たに厚くなればなるほど、こなたに薄くなるのであり
ます。この栄光の国の、わがために備えられしを知り
て、私どもはこの世の欲望^{のぞみ}が日々薄らいで来るので
あります。そうして耳にかすかにその音楽を聞き、眼
にかすかにその輝きを望みて、私どもの心は飛び立つ
のであります。しかり、幕一枚であります。そうして

すべての誘惑こころみは終わるのであります。すべての涙はぬぐわれるのであります。イエスを面前まのあたり拝しまつるのであります。愛する者に再会するのであります。すべての疑問が解けるのであります。すべての誤解が氷解するのであります。そうして新しき自由の生涯に入るのであります。人は人生が短いとて歎きますが、クリスチャンはその長からざるを感謝するのであります。栄光の国は今や目前に横たわるのであります。喜びてもなお喜ぶべきではありませんか。

(12月29日項)

これをもって話を終わりますが、最後の祈禱も内村の「祈り」(『続』)には祈りが二篇あります。その一つです)をもって行くことをお許し下さい。個人的な長話をご静聴下さり、まことに有難うございました。

イエス様、私は貧しい、かつ力の無い者でありまして、アナタと同胞のために何もなすことができません。ただこの事をなそうと思えます。すなわちアナタと共に苦しもうと思えます。そうして苦痛の同情を私の同

胞に供して、少しなりと彼らを助けようと思えます。私は、アナタが私を助けたもうにあたって、金や銀やその他のこの世の物をもってせずして、苦痛の同情をもってしたもうのを見たてまつりまして、人を助くるの最も良き方法は決して金銀を施すことではないことを知りました。私にとりまして、アナタの御同情が何よりかの慰めで、また何よりかの能力ちからでありますから、他人にとっても同じであるうと思えます。ドウゾ私もアナタのような、人の救者すくいとなるように、私を助けてください。

アアメン。

(3月22日項)

(所載) 「みぎわ」第55号

二〇一五年一〇月

浜松聖書集會

